

^ 13
3188
11



門 へ 13
3188
巻 11

武振色し冊之内

昭和十一年
六月二十五日
東京

松下

玉川日記五編卷之下

江戸戯作者

楚満人改

鳥永春水著

第三回

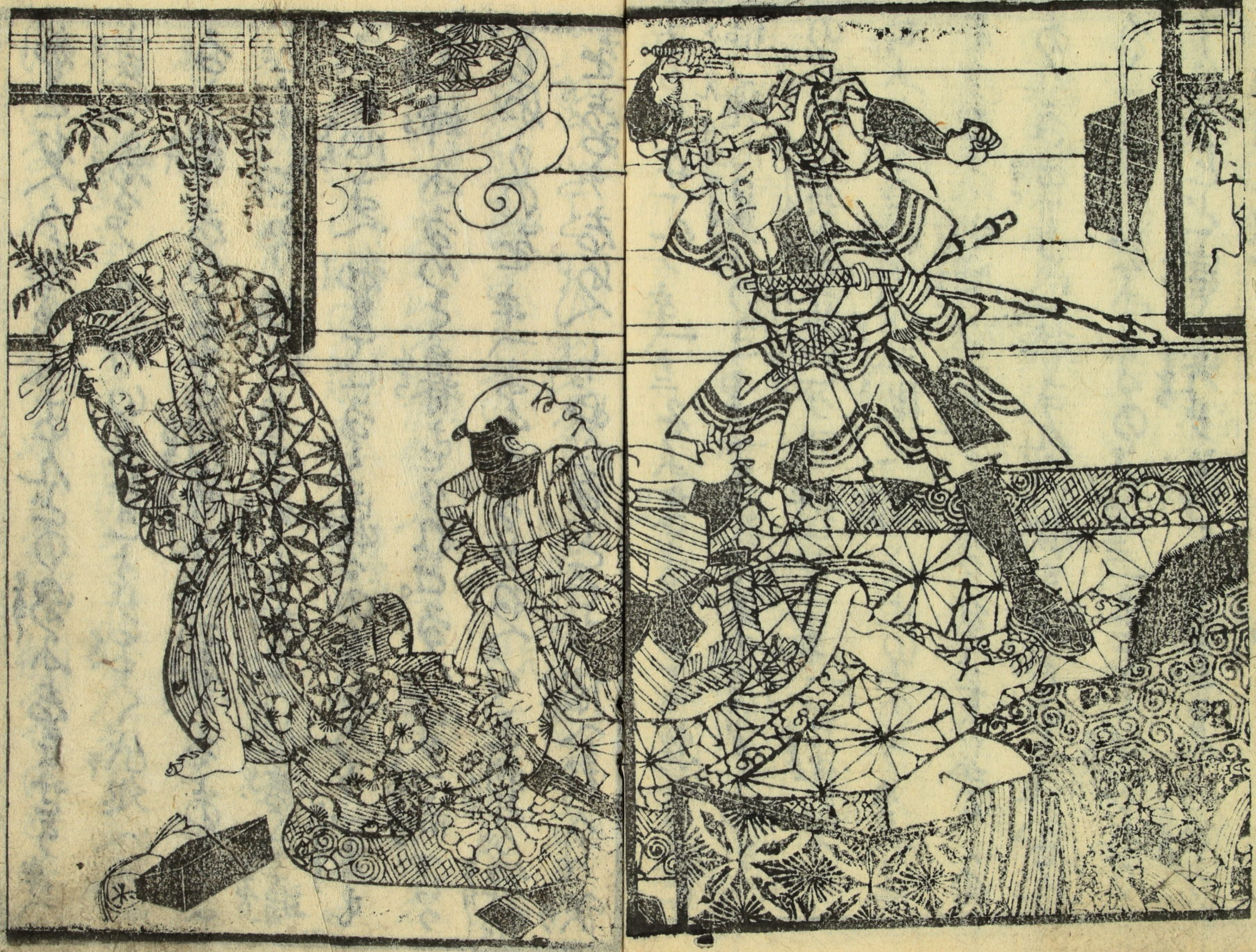
性其に随まひ真しんを修とるのハ壽くわ多く利りを損たつ
慾よくを忘わすれ老らうを減へびむと多おほしるハ所ところ習なむ
及およ心こころハ一ひと点てんをうりうり私わたくしの心こころにのこもつるハ色いろ
て。芦あし間まの蟹かににあらるるみ。上うへ小こ同どうがつ死し様さまは
ゆく。人ひとの心こころぞ不ふ便べんる。是こゝろ等らの人ひとを突つ突つの天てん

玉川日記五編下

よりハるまじと。みる己まよりなりのる。卒
 八か貫が色香に迷ひ面を犯して口説と又
 ども。羞引さむバ煩惱のやたさるさみ遠と
 と。尋ねて来る楼も。あつも多ふおの化粧
 板表院の連子の筒。あひの外るおぬまが
 會秋その耳ににひるさむと。殺も重るる盡
 に。酔伏してまは海を知らむを國をさく。金さバ狂
 心のおぬまらる。居るを声たち。よふ同やとる。

廊下の足音。あつる障子もさらくと。響く。マヤ
 卒八さんお同業久。こと下へ淨なみせと。
 ア。モシあま入先。ひくら。ヤレ物。あ首。ひけ。あのと。
 けで。くく。おひひ。う。誠。お其のる。と。お夫。
 で。おお。あまの心。も。し。お。と。知。て。の。ん。と。ト
 お。し。ま。お。う。後。向。卒。八。お。あ。ひ。よ。う。お。碑。う。う。
 酒。も。あ。つ。と。共。に。さ。め。て。あ。ら。く。と。起。り。卒。八。ナ。ク
 お。見。よ。お。あ。と。こ。ら。お。清。る。お。お。お。さん。お。あ。人。

五十一



五十一

五

りつぞや。吾侪が身にうえて。慈助さんうら買
 ました。鯉の画のうけ物を。是非ともくして
 る。ぬいじけを。大事に仕舞ておたはし。何
 へいりうらるくならん。まう色くりに尋ねても。ま
 たり。往方ぐ。知をません。それふは。いへ。吾侪
 の母さん。今。鎌倉に。まら。を。牢へ。遠入
 居ると。い。お。や。て。る。り。と。掛。お。の。在。家。は。か
 きて。い。る。こと。も。い。ら。る。共。に。當。は。る。り。サ。其。所。を

慈助さん。う。あ。ま。い。寸。分。違。ひ。る。鯉。の。画。の。掛。物
 を。ま。う。一。幅。持。て。ま。え。大。事。に。し。て。居。る。と。い。う
 ら。ぞ。や。い。や。う。こ。も。あ。り。あ。ま。ぞ。吾。侪。が。あ。い。に。い。そ。の。掛
 物。を。買。う。と。い。う。知。ま。と。野。へ。知。く。と。い。う。大。う。と。夫。で
 海。で。あ。る。そ。う。と。い。う。を。母。さん。の。今。の。昔。組。を
 佐。と。い。う。と。い。う。は。い。と。深。さ。ん。を。も。ま。じ。ぐ。在。野。の
 五。川。中。を。相。禪。が。と。ら。に。遣。た。れ。ど。今。ふ。る。ん。と。も
 沙。汰。も。せ。ぬ。夫。に。あ。ま。も。あ。り。て。の。通。り。と。い。う

してありきと。魂たまごそのぬきの罷まゐ彼か惣助そうすけが野持のりもち
 るに。猶なほても知しるものるれば。あなうのみ忠ちゅう取とぬ
 まづ真まことの心こころを。幸さいへつ惣助そうすけが持もちたるのみあつしのこと
 るらざるものるに。二三日待まちて居ゐるら。そのや
 間ま遠とほるくあひのふ。入いれかたれしてあつしあつしが
 代かりもあつしあつしの深ふかの井い希まれと。さると切きてこりよ。花はな枝え
 を。えわひのや。渡わたされ給たまへ世よに。まてく。そまハお
 安やすいと。全ぜんて今いまもりよ通とほり。あつしあつしら切きてはま

つうと。あつしあつしと居ゐる野のどりのを。幸さいへそんあら夫それで
 相あひま譚だんきまうり。さうく此こゝへ遠とほ入いて寐ねむ。まてく
 まると夜よが明あらる。あま。おまてお結むすぶ。今いまり。こ
 掛か物ものをさくお持もちたら。幸さいへその掛かあま。屋や田でん
 へ。得えて。盗ぬすんで遣やみ遠とほひ。あつしあつしの夫それに。つひても寐ね
 おとや。あま。強たかく。あつしあつしが。まてく。おとま。こ。引ひく。せ
 るを。心こころの裡うちに。あま。ハ何なんと詮せん方かたなく。今いま野の心こころに
 随したがう。あつしあつしの。彼か一ひと曲まがを。手てに。ひ。あつしあつしの。妨たがう。ん。う。さ

是れを殺るる身にも女子の節を以て身を
 汚さずと思ひしを僅小律のとのりも。四日五日
 の間あつては卒八小汚さすてきたと思ひのり
 心の裡しるはせんと十方小く言て思ひのり
 の花蔭穂に物を曉らして後の障色
 返白を給らしては横のらち。ちづと切る卒
 八日同ころの思ひ今あごととお母をどつと
 思ひよする。かゝる野へおのその潜戸いと荒ら

う小わくひらき。月元公の証をよをりく
 階子のおと胸小裏く卒八お母をうらみ
 起あが野へまゝる雑人ども。ちづ小早雲搔
 らるを是れと見ぬと十の光り小卒
 八が帯もろく。手早打拾。屏風さりと
 おく除て。こを置々しき何のぞ人たがひし
 後悔あること言せもあむと雑音等。人たがひ
 舌長く。程よ銀六惣助の二人がはより

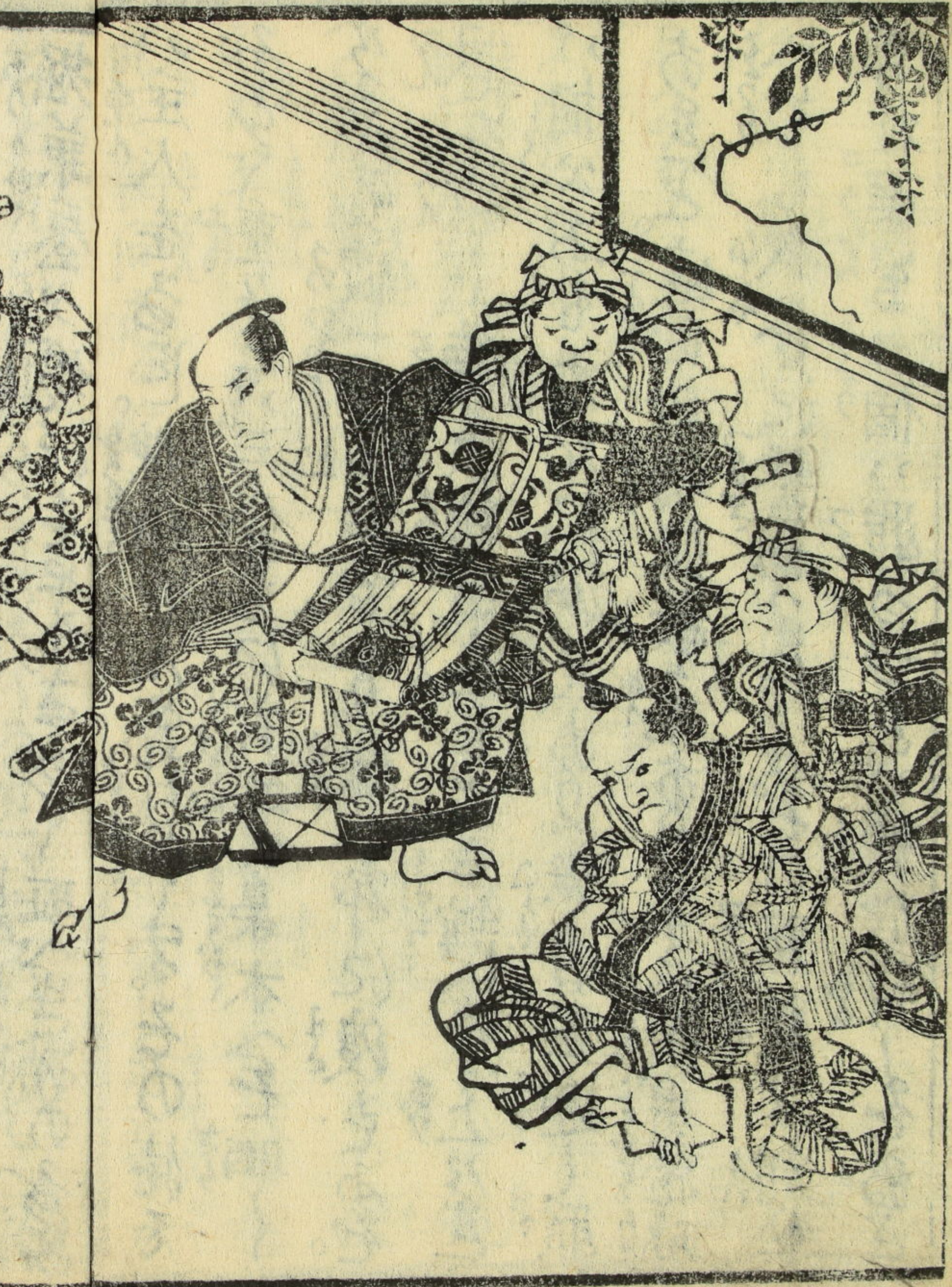
り。高井戸右衛門踏込。野畑織子と流
 る打拵。二人の徳目引世傳。そまこととるより
 深江糸を近く招き。面を和らげ「サウ、その
 方若年にて。武子の親苦をまよつこる。定
 めて我をも後子死。校者とするん。只遠回
 こそ。吾心中あけて。汝にまらさる。一跡全君
 月元家の領地。小おいて堀兼屋と。まこと調布
 屋の二人の豪家。他小並ぶる。死筋目めて
 往昔よりの由緒も。汝若年にて。いつる
 ところ。調布屋の後家のお糸を。深く恋ひ漫
 に私情を通さる。月元の相公。お糸
 年四十に近く。汝をいまだ徳角の似も
 似つぬ。色情る。かおと下る。後竟に。両
 家の衰微。さるもの。汝をどよく討ひて。
 集苦二人。中を遠ざけ。深江糸。中を似つる。か
 き。縁を組。て夫婦とる。まことお糸。はまま。

ちのいほいほとておぼしめしむるに女たるは人の身
 らまは。渠をよむとて側女とも隠し妻ともなる
 さんゆも。律儀やうにもなるべし。渠等兩家ハ
 外るるぬ。由緒のおぼしむるは。風にあても心
 苦し。極内このおんもあるせ。まゝのまゝとてけり
 ハ。秋のまゝにもなるぬ。ぬるぬると謡ひ物おも書
 たまは。遠さけいんて難きよ。似。言と。會者足
 難の理あり。強く難とぬ。正もあ。べし。小子
 内。射ひてえいんに。必しも。直心易く在。ま。と。を
 おん言。真平とて夫より。何うもつけ。お糸に。情
 をかけり。程を程で。さふ。瀬。さふ。あ。ら。後。と。
 程。さ。あ。く。ス。る。謠言。い。て。心。を。引。る。に。膠。漆
 の。ど。く。る。る。汝。等。二。人。が。身。の。上。る。れ。ば。遠。さ。け。い。ん。と
 ちのいほいほ。此。処。ふ。あ。お。て。生。は。實。根。た。若。ふ。阿。羅
 漢。ふ。を。給。う。と。律。を。い。ひ。舎。め。飛。よ。六。社。の。地
 内。にお。て。母。が。隠。ま。あ。ふ。の。も。傾。よ。り。兼。初。の

丁多計らひ。業に遠くを方々。徳吉と見え言
 うらして。後他国へまるといひ。噂をば。役更ふ
 由るたところとせ入る。彼宝物の一抽を奪はせし
 然身を責む。安閑やと。履きふあつた。たゞ
 一抽の盗人を。かねて心はたさう。是と懸
 る証扱ひ。漫おとて。突の。様もするらば
 後の悔。騎を嚙む。逆みる。あふのうら。寄
 探。風輪の。宇市。茶。ある。昔。その。か。その
 親。ま。老。あ。て。密。事。を。借。り。お。た。た。に。汝。図
 ら。む。と。鳩。吉。の。お。ま。を。は。ま。て。園。田。不。至。と。重
 き。病。は。艱。難。く。宇。市。が。業。の。功。に。よ。り。全。快
 は。し。る。一。位。一。竹。も。着。た。あ。が。祈。へ。は。て。祥。に。知
 て。居。る。る。り。そ。の。後。宝。の。一。抽。を。持。参。る。世。し
 不。履。の。の。る。り。彼。徳。助。よ。り。買。り。たり。と。い。ふ。も
 一。の。よ。か。ら。る。る。ま。じ。バ。徳。小。目。の。あ。た。銀。六。を。行。て
 さ。あ。く。ふ。謀。り。て。ま。じ。バ。徳。と。その。虚。に。衆。と。吐

りがくゝる悪事の根本をさるゝち長るる徳助と
 卒八がちろゝひめて奪ひえたるおのじたるれバ
 その報六を男鳥あておびた寄る徳助を
 縛めて之バ伴明白さて卒八が在家をとへバ
 箇様とのるによりお母を買人と化粧さる
 市並屋といひ妓楼にありと告るあうり時目
 を移さむ彼等小路の案内をせたりと見え
 且バ案にたぐなは此楼あて縛めぬかくて
 室もやり戻し長多にあまが座々に相公へ
 おびんハ易々れども汝りるぞや質物もて出
 るる罪に牢舎せしを道言し出る罪あれば後
 を黙止あたと協りぞ爰において一油を汝が身
 みてさへ上るるその罪忽地赦免あるを
 あるも心泊れと伴ありはしを曉たまるる際二
 舟もお母も僕に高井ハいともむくつけき悪
 鬼よると思ひ居るに堅凍初て朝日に向ひ

富士が根の雪氷雪月の。を鼻若に漬る心地も。
 只管吾此の放蕩随弱を。今さら悔ゆれ
 ちらるる。のめきことも是まをるの。遠奴を
 よひと先も。在野へゆつて決断せん。とさへ徐く
 高井戸ある。跡にちこぐみ深二帯。まこ三人の縄
 つたを警固の武士等。いつゆく。さきくその次
 の月。玉川るる月元の。館へ引くと往々を
 逸く鞠問まるに。悪事の稍ぬ白る。亦復た
 主人をるに。押領せんと計救する。その法を
 るとく。重々且バ。三人をもに首刎て梟木へを晒す
 なる。さて彼一油戸あるより。深二帯に渡さるを
 恩を感へ徳を執る。並に館へ上り上り
 相公あも。ちたに満足あり。獄舎を迎し罪
 あまご。遠回の功に赦免あり。まこ。彼用務
 八等も。獄舎に繋あつて。その賊罪は。刑せ
 られ。渠等二個ハ。罪るの。頓に許しを好く



仁惠はと。室の一油より戻し。吾子の罪をのり
 さしそ。ゆりの来ぬまは優曇華の春に遭する
 心地して。鶉の喙する方もある。まに人をまら
 せしお母が身代市被屋へ償ひく。まの侍。
 此月おろの浪く。病む人の世後何と。年
 も性ぬにさるぐの。辛苦を重ぬ。心操。あ
 堀兼屋が。姪にまもも。まらく。耻なきの。あるま

物ど。元と。連と。走つ。る。目。バ。その。親。へ。物
 後。の。ど。て。た。心。ぐ。る。を。お。堅。た。井。多。夫。婦。が。い。い
 み。つ。け。さ。て。そ。の。親。を。索。ぬ。れ。バ。千。代。田。村。の。穀
 物。屋。を。て。芦。を。屋。田。雀。六。と。い。ひ。の。り。じ。が。三
 年。以。前。に。辞。せ。て。跡。は。が。ま。ま。き。漢。も。も。る。れ。ハ
 伯。母。の。人。に。養。ひ。目。金。井。橋。の。住。ら。る。り。夫
 より。伯。母。を。母。と。して。養。ひ。子。と。る。り。て。暮。ら。たり。と。
 彼。の。夫。婦。ハ。下。僕。る。信。助。に。言。ひ。入。へ。と。金。井

携かふはつうじつ。髪かみ結むすお六竹たけの子こ婆ばのの。二人ふたり
 をを伴ともひまるまふふまままま。その人ひととハハ熟じゆくひひつつ。二人ふたりふふをを
 物もの詰づふふ。お六元げんより異あ義ぎももああるる。竹たけの子こ婆ば
 いいその素もと性じやうししと頑こるる者ものあるるままど。彼かれををはは家かのの
 娘むすめととせせば。性じやうまま急きゆう為なままももるる。庭にわへへてて巻まをを
 送くわりりふふぞ。夫婦ふうふ安あん堵どのの女めひひををるる。かか野のへへ
 調てう布ふ屋やのの生なま管くだ。実まこと義ぎまままままま。そのそのふふ女め目め
 形かたち似に似に宅たくるるまままま。何なによりよりああるる。重おも置おとと賀が。終はつ
 まま吐と息いきつつたた。そそままふふ引ひ久くおお糸いとささるる。三さん四し日にちああ
 何なに方かたへへ。不ふ圖と出いららまままま。夫おとこよりよりまままま
 人ひとをを雇かこひひ。草くさ木きををここけけてて索さく結むすもも。まままま小こ性じやう
 方かたハハおおまままままま。りり小こ針はりららひひ中なかささんん女めとと女めよりより
 ままままとと夫おとこ婦めかけををちちららめめ。俱とももも驚おどろききくく深ふか二ふた布ふハハ心こころ小こ
 そそまままま男おとこふふよりよりまままま。暇あま多たのの人ひと殺ころををてて四し方かた
 へへ社たせせきき探たずせせままもも。曾そでで少すこののままががるるままももるる死し
 世よのの人ひとににるるりりとと人ひととと懸か死し迷まいいれれままもも。まままままま

まま吐と息いきつつたた。そそままふふ引ひ久くおお糸いとささるる。三さん四し日にちああ
 何なに方かたへへ。不ふ圖と出いららまままま。夫おとこよりよりまままま
 人ひとをを雇かこひひ。草くさ木きををここけけてて索さく結むすもも。まままま小こ性じやう
 方かたハハおおまままままま。りり小こ針はりららひひ中なかささんん女めとと女めよりより
 ままままとと夫おとこ婦めかけををちちららめめ。俱とももも驚おどろききくく深ふか二ふた布ふハハ心こころ小こ
 そそまままま男おとこふふよりよりまままま。暇あま多たのの人ひと殺ころををてて四し方かた
 へへ社たせせきき探たずせせままもも。曾そでで少すこののままががるるままももるる死し
 世よのの人ひとににるるりりとと人ひととと懸か死し迷まいいれれままもも。まままままま

とも詮方子。さて調布屋の主。るる目バお糸
 が父る。窮作ハ。ちや老耗して物の用ふまへま
 考ふちあらねども。居らぬ不増たる。工もあら
 んど。是も井まぐ。村らひにて窮作を引とり。
 万事ハ。今代の実務に。後見さす。と活生を。
 以前にかららむる。おまぬ。さては件も片付
 けり。おまこと深二帯に表むれ婚姻さして近き
 事りの。入ふも強めせんもの。さうに吉日を擇

法改めて経言の盡さく。事團圓にゆると
 りすも。深二帯が心中に。かろちおまぐ。身の性
 か。りつあや案。暮まらえ。くらまに。まじどあひ
 あの中らひるる。深国の。契まら。しと法くら
 ば。まのあところ。今日とま死。ゆで。した春をむ
 久法。親不。おま。ハ懐胎。玉の。かうる。をの。こ
 産。その。羅愛ハ。限らま。く。後ハ。栄たり。ま
 作者伏して曰。親不。は編巻尾に。いり



律圍回まことりめとりいざも。彼前集の因
 果を引く。深くちたまる深二糸と。糸
 が中の避をさる。まのたか糸他邦へ
 往く。心の中ハいつる所謂ぞまの深二糸
 もお世をゆくと終ふ子をさ産なり共
 そまを本意とるまへくまの理をも
 とれ曉して全く満尾ふるまんとあまを紙
 中限にあらと律を長く。あまづくせれ

今まふ至らむ。あまらく筆を閣て道ま
 に拾遺の一部を草く。その看官の疑ひ
 を氷解せん。と欲するのまお世が所持世
 因縁ある。一論菊の叙ハ今故あまか
 糸がまにありける。拾遺に詳なり。作者の
 累の漏せくる。看官固く察く。

王川日記五編卷之下 終

三ノ...

狂訓老人

為永春水元稿

繼蝶歌川
國丸畫圖

春水が舎友

松亭金水補綴

子

丁子屋平兵衛

江戸 西村屋與八郎

子

美玄香

大坂 河内屋茂兵衛

子

仙女香

江戸 丁子屋平兵衛

